

## 共同住居入所の体験に関する研究 —入所の動機・入所前の準備や思いに焦点を当てて—

松崎 緑<sup>1)</sup>, 西川 薫<sup>1)</sup>, 戸田由美子<sup>1)</sup>, 赤沢雪路<sup>2)</sup>  
小松澤美代<sup>3)</sup>, 岩崎みすず<sup>4)</sup>, 高濱圭子<sup>1)</sup>, 丸山義浩<sup>1)</sup>

**【要 旨】** 本研究の目的は、精神障害者の共同住居入所前の体験を明らかにし、地域生活への移行を目指す精神障害者に対する看護について検討することである。対象者5名に面接を行い、その内容を分析した。入所の動機は、〈生活の利便さ〉や〈自由さを期待して〉等の変化を望むものや〈家族・支援者に勧められて〉等の周囲の働きかけによるものがあった。また、〈将来を懸念して〉〈次のステップとして〉〈自ら希望して〉入所した対象者は、将来の見通しを立てていた。入所には〈入所手続き〉や〈引越しの段取り〉等の準備が必要で、〈入所に向けたアドバイス〉や〈体験入所〉が支えになっていた。こうした体験の中、対象者の思いは〈新たな生活への不安〉を持ちつつ〈支えられている安心感〉を得て〈将来への希望〉を抱き、〈前向きに変化〉していた。看護者は、早期から地域生活を目指す精神障害者への看護を展開し、当事者の動機づけを強化し、移行するまでの揺れる過程を支援する必要性が示唆された。

**【キーワード】** 精神障害者、共同住居、動機、準備、思い

### はじめに

日本における精神障害者の脱施設化の動きは、1965年の精神衛生法改正にまでさかのぼる。1987年に施行された精神保健法により、入院中である精神障害者の社会復帰の促進がうたわれたが、精神障害者の受け皿となる生活の場を地域に確保することは予算の確保や地域住民の理解不足などもあり困難な状況が続いた。その後、1993年の精神保健法改正により、地域生活の場のひとつであるグループホームが法定化された。さらに1995年には精神保健福祉法が制定され、精神障害者の自立を促す取り組みが強化された。

また、2002年に厚生労働省から公表された「今後の精神保健医療福祉施策について」においても精神障害者の地域生活を目指した方針が掲げられた。以上のような精神保健医療をとりまく法的・社会的変化を背景にして、病院では自宅や共同住居、援護寮などにおけ

る地域生活への移行を目指す精神障害者に対する看護が求められてきた。

研究者らは、地域で生活する精神障害者を支援するために、Y市における共同住居設立に協力し、運営を支援している。そこで精神障害者の地域生活への移行を目指した看護の基礎資料とするために、共同住居入所の体験に関する研究を行うことにした。

精神障害者の社会復帰に関する研究は、全国規模のニーズ調査（山内、2004；山角、2004）、共同住居に関する研究は、「共同住居の試み」（杉原、竹本、1985；宮地、1985）、「共同住居の治療的意義」（稲村、1987）などが行われている。そして、共同住居入所へ向けた看護に関する研究では、患者が抱いた不安に対し具体的な情報を提供し不安の軽減をはかることや、地域生活を送るために必要な調理や掃除といった日常生活の体験を積み重ね、患者が自信を持つことが大切であると報告されている（藤田、1997；伊藤、2002）。また

1) 長野県看護大学 2) 横浜市立みなと赤十字病院 3) 千葉大学大学院看護学研究科 4) 山梨大学大学院医学工学総合教育部  
2006年10月10日受付

佐藤（2000）らは、退院を拒否している長期入院患者に対し、患者が示した共同住居への関心、たとえそれが些細に思えることであっても、その関心に焦点を当て援助することが患者の共同住居入所に対する姿勢を前向きに変化させると述べている。

研究者らは、今後も当事者自身の立場に立って支援を行うために、前述の事例研究から導きだされた結果をふまえ、当事者の体験に焦点を当てた研究を行うことで、より具体的な看護への示唆が得られるのではないかと考えた。そこで本研究では、精神障害者の共同住居入所の動機、入所前の準備や思いに注目して入所に至るまでの体験を明らかにし、精神障害者の地域生活への移行を目指す看護のあり方を検討し示唆が得られたのでここに報告する。

## 研究方法

### 1. 研究デザイン

質的・帰納的記述的研究

### 2. 研究対象者

A共同住居入所予定者および入所者5名

### 3. データ収集期間

平成17年8月～平成18年3月

### 4. データ収集方法

複数の研究者によりデータ収集を行うため、研究者間のインタビュー力と質問項目の妥当性を検討する目的でプレテストを行った。その結果に基づきインタビューガイドを作成した。

その後、入所前の生活に焦点を当てた半構成的面接を行った。面接を行った時期は、入所2週間前が2名、入所2週間後が1名、1ヶ月後が1名であった。対象者への面接依頼は入所前に行ったが、面接の実施時期は対象者の希望に合わせて決定した。面接では、入所に至る経緯や思い、入所までの準備について自由に語ってもらった。面接の所要時間は平均44分であった。なお、面接内容は同意を得たうえで録音した。

## 5. 分析方法

半構成的面接によって得たデータに基づき逐語録を作成し、入所の動機や準備、入所前の思いについて語られているデータを抽出した。その際、抽出したデータに対象者の入所後の体験が含まれないよう注意した。抽出したデータの意味について検討しながらコード化し、類似したコードを分類しながらカテゴリー化した。対象者5名分のカテゴリー化が終了した後、各対象者のコード及びカテゴリーの特性をふまえて再検討を行った。分析結果の妥当性を確保するために、共同研究者で時間をおいて複数回検討し、カテゴリーが妥当であることを確認した。なお、検討は共同研究者のうち5名が参加して行った。

## 6. 倫理的配慮

対象者に対し、文書にて対象者自身の権利とプライバシーを尊重することを説明した上で研究協力への同意を得て、同意書を交わした。得られたデータは、鍵のかかる場所に保管し、部外者の目に触れることのないよう研究者が確実に管理を行った。また、面接で得られた対象者の言葉を本文に使用する際には、個人が特定されないよう必要最小限の記述にする配慮をした。なお、本研究計画書は平成17年5月長野県看護大学倫理委員会の審査を受け、承認を得た。

## 結果

### 1. 対象者の属性

対象者は男性3名、女性2名、年齢は30歳代1名、50歳代3名、60歳代1名の5名であった。入所前は、4名が援護寮に入所しており、1名が病院に入院していた。入院期間は、20年以上2名、15年以上19年以下1名、5年以上9年以下1名、2年以下1名であった。過去に就労経験がある者は4名、現在、就労している者は1名で、他の4名はデイケアに通っていた。全員が障害年金2級を受給しており、その管理は、自己管理4名、職員管理1名で、週1回職員よりお金を受け取っていた。（表1）

表 1 対象者の属性

対象者	性別	年齢	入所前住居	年金受給	過去の就労	現在の就労
A	男性	50歳代	援護寮	受給	有	無
B	男性	50歳代	援護寮	受給	有	無
C	女性	50歳代	援護寮	受給	無	無
D	女性	30歳代	援護寮	受給	有	有
E	男性	60歳代	病院	受給	有	無

2. 分析結果

入所を決定した動機,入所へ向けた準備,入所への思いを分析する過程で抽出されたコードとカテゴリーを表2に示す.

表 2 共同住居入所の動機・準備・思い

カテゴリー	コード	
自ら希望して	またとないチャンス/自分でやってみたい/入所制限がない	
入所を決定した動機	調理指導で上手くいかなかったので入所して教わった方がよいと思った/入所に納得した	
	一人暮らしのステップを踏むことを理解した/一人暮らしができると思って入居は考えてなかった	
	いずれはアパートで一人暮らしする/支援者の調整によって決めることができた/そのうち選択できるから	
	自由な生活を期待して	自由な生活がしてみたい/援護寮より自由/入院生活の煩わしさからの開放
	将来を懸念して	親が高齢で今後の生活が不安/帰る家がない/援護寮には期限がある
生活の利便さ	駅やお店に近く交通費がかからない/行きたいときに行ける	
支援者に勧められて	入所先の職員に話を聞いて/主治医より勧められて/指導員に勧められて/病院の施設見学に参加	
家族に勧められて	1年くらいなら入所しても良いかと心変わりした/家族の説得に納得した	
地域住民の理解を期待して	地域の人にわかってもらいたい	
入所へ向けた準備	生活技能の習得	掃除の練習/練習は役立った/一月前からデイケアに通った デイケアでの充実感はある デイケアに出ないとお金を使ってしまう/節約している/準備は大変だった/時間調整ができない
	引越しの段取り	荷物の整理/準備は特になかった/楽しく困ることなく荷物が整理できもう行ける状態 布団の購入と管理をしてもらった/関わってくれたのは看護婦 助かった支援はたくさんある 支援に順番はつけられない/荷物を捨てた
	入所に向けたアドバイス	金銭面と人との付き合いについて指導員よりアドバイス 体重コントロールと人との付き合いについて主治医よりアドバイス 生活の細々としたことを職員に指導してもらった
	体験入所	入所体験で食器の置き場が分からなかった/入所体験では未知の世界だった/二回の体験入所が役に立った
	入所手続き	入所説明は役に立った
	生活リズムの調整	早寝早起きはできる/入所決定後眠れないことはない
	新たな生活への不安	一緒にやれるか不安/最初は入所が心配だった/先が分からないから心配 はじめての生活への心配
	支えられている安心感	地域の偏見を挽回したいという思いを支持されてうれしい/何重もの輪で支えられている感じ 身内が保証人になってくれた 支えてくれたのは援護寮の職員/援護寮職員に話を聞いてもらい助かった 援助者の励ましで行く気が保て/援護寮入所者との会話に助けられた
	前向きに変化	気持ちの揺れは前向きに気楽に変化した/入所に向けて気持ちが明るくなった 働きたいと思うようになった/入所に向けて自分を励ました がんばってやっていきたい いきいきとした生活がしたい
	日常生活への心構え	通院継続の大変さを覚悟/お金の使い方/お金は貯まらないと思う/お金が足りるか心配だけど何とかなる お金は少ない中で有効に使うと思う/一緒に行くルームメイトとはいい関係になっている なんとかやっていけそう/食事作りは嫌じゃない/当番性の家事は負担じゃなくストレス解消 前向きな気持ちでいる一方で,地域に馴染むか,金銭面のことなど不安はあるが,普通に生活していたら問題ないと思う 身体的なことは主治医に相談する
入所への思い	新たな人間関係への自信	顔見知りの入所者がいる/うまくやっている/不安はない
	将来への希望	希望は特にない/パートでいいから働きたい/いずれはアパートで暮らしたい 自分の思うようにならないと思ったがいずれ出られるのならいいと思った/今の生活でよい あたりまえだけやって,暮らしていければ良い
	住環境の快適さ	人間関係の良さ/援護寮よりはいい/一人部屋に住める 買い物が近い/一人部屋に感謝 友達が来てくれると思う/入所すればこの人たちとも別れられるので我慢した 規則が厳しくなり窮屈だったので(援護寮を)早く出たかった(車,洗濯,テレビ,消灯) 規則を考えなくて済む/いろんな荷物が入りよかった/土日に町に行けるし近い
地域住民へのとまどい	地域の受け入れを気に病んだ/地域受け入れの不安/地域の人に協力してもらえるかもしれない 以前地域で意地悪された経験がなく今回もそんなつもりでいる	
事前情報の不足	禁酒か知りたかった/早い時期に説明して欲しかった	
入所後の要望	トイレを別にしてほしい/いただける物はただでもってほしい/爆発したときはなだめてほしい 共同生活のルールを守ってほしい/話し相手とかなく嫌だった/働く人に来て欲しい	

## 1) 入所を決定した動機

共同住居が設立されることを知り、入所を決定した動機として、〈自ら希望して〉〈次のステップとして〉〈自由さを期待して〉〈将来を懸念して〉〈生活の利便さ〉〈支援者に勧められて〉〈家族に勧められて〉〈地域住民の理解を期待して〉の8のカテゴリーが抽出された。

共同住居への入所を自分にとってまたとないチャンスであると捉えたり、長期入院を経験し、自分自身で生活してみたいと考えた対象者は、〈自ら希望して〉入所を決定していた。その際、援護寮では2年間という入所制限があるのに対し、共同住居には入所制限がないという施設の特徴を踏まえたうえで決定に至っていた。

対象者の中には、共同住居ではなく、アパートでの1人暮らしを希望する人もいた。しかし、1人暮らしの場合、生活全般に渡り全てのことを自分で行わなければならないようになるため、実際に1人暮らしを始める前に〈次のステップ〉として共同住居に入所し、1人暮らしの準備期間と捉えていた。

研究の対象となった精神障害者が生活する共同住居の定員は5名である。対象者は、今まで生活していた援護寮（定員20名）や病院での集団生活と比較し、共同生活を行う人数が減ることに対し、新たな生活への〈自由さを期待して〉いた。

一方で、援護寮には2年間の入所期限があること、親の高齢化、持ち家をすでに処分しているなどの理由から、現在の生活を継続することに不安を覚え、〈将来を懸念して〉共同住居への入所を決定した場合もあった。

また、共同住居は、現在生活している援護寮や病院がある場所よりも駅に近いという〈生活の利便さ〉も動機づけとなっていた。

入所の決定は、主治医や看護師、生活指導員、共同住居のスタッフなどの〈支援者に勧められて〉行っていた。看護師からの働きかけとしては、社会復帰を働きかけるために病院で企画した施設見学がきっかけとなっていた。あるいは親が子どもである対象者に対し、共同住居で生活してほしいという思いがあり、〈家族に勧められて〉入所を決めた場合もあった。

対象者の中には、精神障害者である自分たちでも普通に生活できることを地域の人に理解してもらいたいという〈地域住民の理解を期待して〉地域での生活を始めることを決めた人もいた。

## 2) 入所へ向けた準備

入所が決定した後、対象者の行った準備として〈生活技能の習得〉〈引越しの段取り〉〈入所に向けたアドバイス〉〈体験入所〉〈入所手続き〉〈生活リズムの調整〉の6のカテゴリーが抽出された。

入所が決定すると、対象者は部屋・トイレ・浴室などの掃除の練習を始めた。入所後、デイケアに通所予定であるため、実際にデイケアに参加し、金銭や時間の遣い方に慣れるなどの〈生活技能の習得〉のための準備を行っていた。

また、〈引越しの段取り〉として、今までの生活で増えた荷物の整理があげられていた。もともと掃除や洗濯を苦にしない対象者の場合は、荷物の整理を楽しみながら行っていた。一方で、現在、所有している荷物と共同住居の収納力を考え合わせながら準備をすることが難しく、荷物が収まりきらないと思え、捨てることで荷物の整理をしていた対象者もいた。さらに、入所後に使用する布団や布団カバーなどの寝具を購入し、保管することを共同住居のスタッフが対象者の代わりに行った場合もあった。

〈入所に向けたアドバイス〉では、主治医や生活指導員より、体重のコントロールや金銭管理、人との付き合いについてなど、新しい生活で注意が必要になるであろう点について口頭で指導を受けていた。また、掃除をする時には窓をあけるのが常識的であるが、冬の場合には、その場にいる同居人への配慮も必要といった細かなアドバイスを受けていた場合もあった。

対象者の中には〈体験入所〉を行うことで、それまでの生活では行う機会がなかった食器を食器棚に戻すという初めての体験をしていた。対象者はこの体験を「未知の体験」と語っており、新しい生活へ適応するために役に立ったと感じていた。

入所にあたっては、共同住居のスタッフよりさまざまな説明がなされ、〈入所手続き〉が行われていた。対象者はその手続きを役に立ったと受け止めていた。

共同住居での生活を始めるにあたり、起床および就寝時間のリズムを整える〈生活リズムの調整〉も準備として行なわれていた。

### 3) 入所への思い

共同住居での生活を始めるにあたり、対象者はさまざまな期待や思いを抱いていることが明らかになった。具体的には、〈新たな生活への不安〉〈支えられている安心感〉〈前向きに変化〉〈日常生活への心構え〉〈新たな人間関係への自信〉〈将来への希望〉〈住環境の快適さ〉〈地域住民へのとまどい〉〈事前情報の不足〉〈入所後の要望〉の10のカテゴリーが抽出された。

対象者は、現在の慣れた生活を離れ、新しい生活を始めることに、同居者と上手くやっていくことができるか、この先どうなるのかやってみないとわからないといった〈新たな生活への不安〉を抱いていた。

対象者はこのような不安を抱きながら、看護師や施設の生活指導員、家族、共同住居のスタッフ、さらには他の入所予定者との関わりの中で〈支えられている安心感〉を感じていた。そして、このような気持ちの揺れは〈前向きに変化〉し、労働意欲がわいたり、頑張っていきたいと生活していきたいという思いを抱くようになっていた。

このような変化は、対象者が新たな〈日常生活への心構え〉を持ち、お金の遣い方や人付き合い、通院の継続や具合の悪いときには医師に相談するといった対処方法について、心の準備をすることにつながっていた。さらに、一緒に生活することになる同居者との付き合いに対し、〈新たな人間関係への自信〉をのぞかせていた。

対象者は、生活の場が変化することに伴い、働きたい、アパートで暮らしたい、あるいは今のような生活を続けていきたいという〈将来への希望〉を抱くようになっていた。

また、対象者は共同住居での生活に対し、〈住環境の快適さ〉に期待を寄せていた。具体的には、1人部屋が確保されることや、人間関係の気楽さ、今までの生活で体験した厳しい規則から開放されること、外出がしやすくなり行動範囲が広がることなどであった。

病院や援護寮を離れ、住宅街に位置する共同住居での生活は、対象者に〈地域住民へのとまどい〉を抱かせていた。自分たちの存在が地域に受け入れられるのかといった不安と、逆に地域住民の協力を得られるかもしれないという期待の両方を抱いていた。

対象者は、入所にあたり〈事前情報の不足〉を感じており、もっと早い段階で、通院についてなど生活に関する細かな説明を希望していた。

〈入所後の要望〉としては、共同生活のルールを守って欲しい、トイレは男女別にして欲しいといった共同生活に関することや、感情的になったときにはなだめてほしいという対応に関するなどがあげられた。

## 考 察

### 1. 当事者の動機を支える

精神障害者はさまざまな理由で入院が長期化し、退院が困難となっている。こうした精神障害者の社会復帰に関する動機づけを行うには困難を伴うことが指摘されている(小林, 1999)。今回の対象者は、〈自ら希望して〉、〈自由さを期待して〉入所しようと決めていた。この背景には、〈支援者に勧められて〉病院で企画した施設見学に参加したことが動機づけを強化していた。

患者の入院が長期に渡り、現実的な社会復帰のめどが立たない状況が続くと、看護者は、患者が地域生活へと移行するという目標を持つことが難しくなる。しかし、今回の研究では、看護者が患者の長期入院という状況でも諦めずに働きかけを続け、そのことが患者の動機づけにつながったといえる。したがって、看護者は、患者が地域生活へと移行する未来の姿を描き、そうした目標に向けた働きかけを続けることが大切であると考える。

また、援護寮から移行した事例の場合、2年という期限つきであることや、今後の生活が心配ということから〈将来を懸念して〉入所を決めた場合があった。仲野(2002)は、地域生活において、患者の自己決定を支えることは生活技術の向上につながるとしており、この場合においても当事者が自己決定を行うまでの過

程に寄り添い、その過程を支えることが求められる。そのためには、当事者の動機を支えることが、地域生活へと踏み出す第一歩となるのではないかと考える。

今回の研究では、〈自由さを期待して〉〈地域住民の理解を期待して〉共同住居への入所を決めた場合や、〈生活の利便さ〉が地域生活を始めるひとつの魅力となっていた。新しい生活に対する当事者の期待はさまざまであるが、それぞれが抱いた期待を受け止め、その気持ちを支えることが、結果的に動機づけを強化することになるのではないかと考える。

## 2. 準備の段取りを整える

準備に関する結果からは、援護寮と病院における地域生活への移行に向けた援助の違いがうかがえる。2000年の厚生省令第87号である「精神障害者社会復帰施設の設備及び運営に関する基準」によると、援護寮の目的は、「精神障害のために家庭において日常生活を営むのに支障のある精神障害者が日常生活に適應できるように低額な料金で居室その他の設備を利用させ、必要な訓練及び指導を行い社会復帰の促進を図る」ことにある。入所期間は原則2年となっているため（理由によっては1年間の延長が可能）、当事者にとっては、一時的な生活訓練の場という役割を持つ。そのため援護寮では、地域生活へ移行することを前提に当事者への援助が展開されているといえる。

以上のような施設としての特徴を持つ援護寮では、日々の中で〈生活技能の習得〉が行われており、入所が決定すると準備として〈引越しの段取り〉〈入所に向けたアドバイス〉が中心に行われていた。特に〈入所に向けたアドバイス〉では、当事者の今後の生活で配慮が必要となる点を予測し、焦点を絞って生活指導が行われていた。このことから、当事者1人ひとりの個別性を配慮した準備が行われていたといえる。

一方、病院でも地域生活への移行を目指した看護が展開されているが、今回の結果では、入所決定後に部屋・トイレ・浴室等の掃除といった日常生活に関する活動を始めていた。また、〈体験入所〉を行った際には、さまざまな種類の食器があり、当事者はそれらを食器棚に戻すことがわからないという体験をしていた。病室やトイレ・浴室の清掃は、病院においては提供さ

れるサービスのひとつであり、また、調理の練習を体験しなければ、さまざまな食器を目にし、それらを食器棚に戻すという体験をする機会も得にくい。このような病院での生活は保護的であり、地域の生活とはかけ離れている。対象者が「役に立った」と語る〈体験入所〉や施設見学は、現在の生活と新しい生活の場の違いを知り、地域生活へ移行する準備として必要な経験だったといえる。入院患者には、作業療法を活用するなど、生活能力の低下を防ぐ援助のあり方を再考する必要性も示唆された。

また、〈引越しの段取り〉として荷物の整理を行う際に、現在所有している荷物と共同住居の収納力を兼ね合わせて準備を行うことに困難が生じた。看護師は、対象者と共に持ち運ぶ荷物の選択・決定に関わり、新しい部屋の収納量を確認したり、不要な荷物の処分などを行っていた。

以上のことから、地域生活への移行を目指す精神障害者の看護としては、当事者の退院が決定してからではなく、早期から地域生活への移行を前提とした看護を展開する必要があるといえる。

また、今回の研究結果からは、入院期間中に地域生活への移行を目指した準備を終了するには限界があり、改めて援護寮の存在意義が示されたと考えられる。2006年8月24日、厚生労働省は、精神科病院の一部を退院支援施設に転用することを認めた。しかし、この方法は同じ敷地内での生活となるため、結果的に社会的入院と変わらない状況を生む可能性もあると指摘されている（「精神科に「退院支援施設」」, 2006）。また、病院の転用は、現在ある施設を利用するため経済的費用を抑えることが可能となる。このような事情より、病院での生活を離れ、地域生活へ円滑に移行するための援護寮の設置数が伸び悩むことが懸念される。

## 3. 思いが揺れる過程を支える

当事者は、入所を決定し、準備を進める中で、さまざまな思いを感じ、揺れていたことがうかがえる。

共同住居への入所は、最終的に自分で決定したとはいえ、生活の場が変化することは当事者に〈新たな生活への不安〉を抱かせていた。しかし、家族や生活指導員、共同住居のスタッフ、さらには他の入居予定者

との関わりから、〈支えられている安心感〉を得ていた。そして、その安心感により、揺れる思いは〈前向きに変化〉することへとつながっている。さらに、この変化は当事者が〈日常生活への心構え〉を整え、〈将来への希望〉を描くことに至っている。

以上のことから当事者は、このような揺れる過程をたどりつつ、入所への移行期間を過ごしていると考えられる。従って、地域生活を目指す看護では、当事者の揺れる過程を支えることが求められ、そうすることによって当事者が本来持っている地域生活を送るための力を引き出すことになると言えるのではないかと考える。

そのためには、当事者が感じた〈新たな生活への不安〉を表現できるよう援助し、それを共有することが必要であるし、場合によっては、当事者同士が思いを表現する場を設定することも求められる。高畑らは(2001)、精神障害者が前向きに生きるきっかけは、当事者の会へ参加することや、当事者の仲間を得て一緒に活動することとしており、他の入所予定者との関わりから〈支えられている安心感〉を得て、〈前向きに変化〉したことは、これを裏付ける結果となったのではないかと考える。

## 結 論

対象者5名に対し面接を行い、それらを分析した結果、入所を決定する動機には、〈生活の利便さ〉や〈自由さを期待して〉等の変化を望むものや〈家族・支援者に勧められて〉等の周囲の働きかけによるものがあつた。また、〈将来を懸念して〉おり、〈次のステップとして〉〈自ら希望して〉入所した対象者は将来について見通し、考えていた。入所には手続きや〈引越しの段取り〉などの準備が必要で、〈入所に向けたアドバイス〉や〈体験入所〉が支えになっていた。こうした体験の中で、対象者の思いは〈新たな生活への不安〉を持ちつつ〈支えられている安心感〉を得て〈将来への希望〉を抱くようになり、〈前向きに変化〉したことが明らかになった。

以上のことから、看護者は、当事者が抱く共同住居への期待を受け止め、動機づけを強化することによって、精神障害者が地域生活へと移行するための自己決

定を支援することが必要であると考えられる。また、地域で生活するための準備としては、早期から地域で生活することを前提にした援助を行い、生活能力を維持することが大切である。

さらに、当事者が入所を決定し実際に入所に至るまでの時期は、やがて生活の場が地域へと変わっていく患者の気持ちが揺れる過程でもある。看護者は、患者が気持ちの揺れを表現できるように促しながら、この揺れを他者と共有することで、患者が揺れる過程を乗り越えられるよう支援することの必要性が示唆された。

## おわりに

本研究は、研究者らが地域住民と共に行っている精神障害者の地域生活を支援する活動の一環である。共同住居入所予定者とその家族の体験および支援者の援助プロセスを明らかにすることで、入所予定者の入所後の援助に役立て、また、今後の共同住居入所者に対する援助の基礎資料とすることを目的としている。今回は、その一部である当事者の共同住居入所前の体験に焦点をしばり報告したが、今後は家族や支援者の体験を明らかにし、共同住居入所へ向けた看護を検討する予定である。

なお、本研究は平成16-18年度長野県看護大学特別研究補助金を受けた課題研究の一部である。

## 謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただきました当事者の皆様に深く感謝申し上げます。

## 文 献

- 藤田裕二 (1997): 長期入院患者の共同住居入居までの支援. 日本精神科看護学会誌, 40(1): 327-329.
- 伊藤由賀里 (2002): 社会復帰病棟の退院アプローチを考える. 日本精神科看護学会誌, 45(2): 21-24.
- 稲村茂 (1987): 精神分裂病者のための共同住居の治療的意義について. 精神神経学雑誌, 89(3): 163-181.

- 小林美子 (2000)：慢性期リハビリテーションのアプローチ，坂田三允，遠藤淑美，精神科看護とリハビリテーション. 66-74, 医学書院, 東京.
- 宮地節子 (1985)：ある「共同住居」の試みを通して考える. 精神医療, 14(3)：44.
- 仲野栄 (2002)：地域での生活を援助するということ；自己決定のプロセスにつきあう. 精神科看護, 29(3)：17-21.
- 佐藤久美子，石原郁代，近藤浩子 (2000)：退院を拒否する長期入院患者への共同住居入居援助. 第31回日本看護学会論文集-地域看護-：50-52.
- 杉原寛一郎，竹本利子 (1985)：ある共同住居の試み. 日本精神病院協会雑誌, 4(3)：62-69.
- 高畑隆，上野容子 (2001)：生活支援の場からみたりハビリテーション. リハ研究, 108：12-17.
- 山角駿 (2004)：サービスニーズ調査からみた精神病床と社会復帰施設のあり方. 日本精神神経学会誌, 106(9)：1152-1160.
- 山内慶太 (2004)：精神障害者社会復帰サービスニーズ等の調査事業の概要. J. Natl. Inst. Public Health, 53(1)：54-59.
- “精神科に「退院支援施設」”(2006. 8. 25)：朝日新聞, 朝刊：2.



【Summary】

# Study of experience of group home admission for people with mental disorder – From the view of motive, preparation and thoughts –

Midori MATSUZAKI<sup>1)</sup>, Kaoru NISIKAWA<sup>1)</sup>, Yumiko TODA<sup>1)</sup>, Yukiji AKAZAWA<sup>2)</sup>  
Miyo KOMATSUZAWA<sup>3)</sup>, Misuzu IWASAKI<sup>4)</sup>, Keiko TAKAHAMA<sup>1)</sup>, Yoshihiro MARUYAMA<sup>1)</sup>

- 1) Nagano College of Nursing
- 2) Yokohama city Minato Red Cross Hospital
- 3) Chiba University Graduate School of Nursing
- 4) University of Yamanashi Graduate School of Nursing

The purpose of this study is to analyze motive, preparation, and thoughts of people with mental disorder before entering a group home and to scrutinize what nurses should support them.

We conducted a semi-constitutive interview with five people with mental disorder, and described and analyzed the interviews in a qualitative method.

As a result, we divided 1) their motive into eight categories: 〈Hoped for oneself〉, 〈As a step of next occasion〉, 〈Expected freedom〉, 〈Concerned about own future〉, 〈Convenience of daily life〉, 〈Offered family / the mental healthworker〉, and 〈Expected understanding of local residents〉; 2) their preparation into six categories: 〈Acquisition of life skills〉, 〈Arrangement of moving〉, 〈Advice for new life〉, 〈Experience entrance〉, 〈The checking-in process〉 and 〈Adjustment of living hours〉; 3) their thoughts into ten categories: 〈Anxiety of a new life〉, 〈Feeling of supportive security〉, 〈Changed positive attitude〉, 〈Mental set of daily life〉, 〈Confidence of new human relationship〉, 〈Future hope〉, 〈Residential amenities〉, 〈Ambivalence for local residents〉, 〈Lack of information〉 and 〈Request of admission〉.

This study suggest that nurses should support their motive and those people particularly on the mental aspects for the ground that they are not mentally stable facing their unexpected and inexperienced life.

**Keywords:** people with mental disorder, group home, motive, preparation, thoughts

---

松崎 緑 (まつぎき みどり)  
〒399-4117 駒ヶ根市赤穂1694 長野県看護大学  
Tel. & Fax: 0265-81-5195  
Midori MATSUZAKI  
Nagano College of Nursing  
1694 Akaho, Komagane, 399-4117 Japan  
e-mail: midori@nagano-nurs.ac.jp